

月報 シオン山

2021年9月5日発行 (No372) |

日本バプテストシオン山教会

〒803-0846 北九州市小倉北区下到津2-15-21

Tel(093)561-0772 Fax(093)561-0760 E-mail:bapshion@eagle.ocn.ne.jp

【月間聖句】

どこまでも主に信頼せよ、主こそはとこしえの岩。

(イザヤ書 26章4節)

「分かち合いたいこと」

田中由紀子

月に1度の礼拝の奏楽奉仕、これがバプテスマ直後から34年間続いている私の奉仕の一つです。当初より、礼拝音楽の知識もなくピアノも素人同然の私が出来るとは、一所懸命練習して祈って精一杯捧げることだと、それだけを心に留めて奉仕に当たってきました。その思いは今でも変わりませんが、年々、奉仕の後に反省することや、行き詰まりを感じることも多くなりました。こうした反省やモヤモヤを教会の皆さんと忌憚なくお話してみたいと願いつつ、今回は紙面で分かち合ってみたいと思います。

私がシオン山教会に足を運ぶようになったのは、1980年代半ばのことでした。その頃、私は南部バプテストのジャーニマンたちの開く Bible Class に参加しており、ある日、そのジャーニマンの1人 Ms. (Beth) Watkins に誘われて初めてシ

オン山教会の礼拝に参加しました。丁度、特別伝道集会の礼拝でしたが、メッセージの内容よりも、当日奏楽担当だった Beth のピアノに私は感銘を受けました。彼女の優美で軽やかなピアノ演奏に、それまでの教会音楽のイメージが一新されたことを今でもよく覚えています。当時、私は西南女学院短期大学を卒業後、一般企業に勤めており社会人 5 年目でした。丁度、幼い頃からの念願だったピアノのレッスンを始めたばかりだったこともあり、音楽やピアノを通して Beth ととても親しくなり、この出会いによって信仰へと導かれることになりました。

バプテスマを受けると、早速、奏楽者と小学科教師の奉仕依頼があり、私は余り事情も分からぬまま引き受けることになりました。理由はただ一つ、断れなかったからです。

どちらの奉仕も苦勞しましたが、特に奏楽は、礼拝にも讃美歌にも慣れていない新米の私には至難の業でした。おまけに、当時は月に一度、宣教師の先生方による「英語礼拝」もあり、時々そのお役も回ってきました。司会者の英語に耳をそばだてながら、初めて渡される英語讃美歌を何曲も伴奏するのですが、一度は大変恥ずかしい経験もしました。全く違うテンポで弾いてしまったのです。一通り歌い終えた後で司会者の先生がこうおっしゃいました。「今のテンポは大変元気が出ましたが、私たちアメリカ人のお馴染みのテンポとは違います。すみませんが、少しゆっくりしたテンポで、もう一度讃美しましょう」と。そんな私に、異口同音に「讃美は人にではなく、神様に捧げるものだから大丈夫よ！」と、皆さん励まして下さいましたが、これはまた別の意味でプレッシャーでした。礼拝を台無しにするわけにはいかないと、夜通し練習して臨むことも何度もありました。でも、断れませんでした。しかし、今思えば、それは単に断れなかったのではなく、その向こうに夢にも似た微かな希望…いつかは Beth のように奏楽が出来たら…という仄かな願いと祈りがあったからだと思います。

以来 34 年間、その夢に到達できたかという、残念ながらそうではありません。むしろ最近では段々とその夢から遠ざかっている感があります。練習を重ねてうまく出来るようになって、奏楽の朝になると全てが真っ白になって演奏できず、時にはその日の朝に曲を変更するということも起きてしまいます。年齢のせいかな？と夫に尋ねると、「あるある、僕もね。だから我々は今までの倍もその上も練習しなきゃならないんだよ。」という返事！更なる練習時間の捻出とは…、信仰生活は闘いだ、と様々に逡巡する私でしたが、そこに思いがけず、一つの答えが与えられました。図らずも Beth との思い出から答えが届いたのです。

先日、実家での掃除中に、私はある思い出の品に再会しました。それは、Bethが日本での任期を終えてアメリカに帰国する前に私の母に贈ってくれたパッチワークの炬燵（こたつ）カバーでした。自分のお気に入りの場所に贈り物をしたいと、彼女が手作りしてくれたのです。懐かしさ一杯でその作品を見ている内に、私は彼女が話してくれた一つのメッセージを思い出しました。「パッチワークはね、沢山のピースをつなぎ合わせて絵や図柄を完成させていくけれど、小さなピースの裏表を間違えないようにするのにとても神経を使うのよ。だけどね、1 か所だけ、わざと裏側を出して、間違えたまま作品を完成させるの。何故だかわかる？それはね、人間には『完全』なもの出来ないということ。つまり、そうやって『神様』のことを憶えるためなのよ。」彼女はそう話してくれたのです。

最後の1ピースで「神様への感謝を忘れないこと」、そして「人間の業は完全ではないと心に留めること」、それは私たちの一人ひとりの奉仕や、教会全体の働きにも通じることではないでしょうか。私自身も祈りや願いを込めて懸命に奉仕してきましたが、奉仕そのものに自己満足して、ささげる先の神様を見失っていたとしたら、それはささげ物ではありません。私のジレンマはそこにあったのかな、と気づかされた時、このBethの言葉は、今の私に一番必要なメッセージになりました。

100周年まで残すところ1年足らずとなり、各グループの働きも忙しくなってきました。計画が具体的に進められるにつれて、1人ひとりに託された奉仕も過密になっているのではないのでしょうか。これより先は、より良く協力し分かち合い、祈りと温かい行いをもって皆様と共に歩んでまいりたいと思います。

